

広島大学マスターズ講演会（第 21 回） 「釣りって何だろう？：釣りの科学」

広島大学マスターズ会員 上 真一

標記の講演会が、2025年1月25日（土）午後3時～午後4時50分、東広島芸術文化ホールくらら 208・209 研修室において、古澤修一広大マスターズ会員（広大名誉教授）により行われた。参加者は約40名であった。

講師の古澤会員の研究の専門分野はニワトリなどの鳥類免疫学であるが、今回は全く畑違いの釣りに関する講演であった。古澤会員にとって、釣りは人生の重要な部分を占めている。東京下町育ちの幼少時から釣りに親しみ、広大を定年退職後の現在は日本フライフィッシング協会会長を務めている。特筆すべきは、広大の現役教員であった時に、1・2年生を対象とした教養教育科目の一つとして「釣りの科学」という講義を立ち上げたことである。この授業科目は広大の名物講義の一つとして、現在でも学生の人気は抜群に高い。



本講演では日本特有の釣りとして「アユ釣り」が紹介された。アユは日本の四季に適応した生活史、生態を持っており、初夏に河川に遡上した若アユは岩の表面に生える苔を餌として成長するので、餌場確保のために夏は縄張りを持ち、侵入アユを攻撃する。この性質を利用したのがアユの友釣りである。友釣り用の長さ約8メートルに及ぶ3種類（竹の繋ぎ竿、グラスファイバー竿、カーボンファイバー竿）

の竿が紹介され、最新のカーボンファイバー竿の軽さを実感することができた。

多くの人々が釣りに魅了される理由は何だろう？その一つとして、古澤会員は「釣りによって教養が身に付き、生きる力が身に付くから」と強調する。幼少時・学生時代から釣りを始めた人は、(1) 自然を尊ぶ意識、(2) 環境・自然保護意識、(3) 粘り強さ、辛抱する心、(4) 自分で考える力、自立性、(5) 臨機応変に対応する力、(6) ものを大切にする気持ち、などが相対的に強いとの調査結果（一般社団法人：日本さかな検定協会）を根拠にしている。だから「子どもの時から自然の中に飛び出して、大いに釣りを楽しみましょう」とのことであった。

講演後、参加者からの多くの質問があり、熱心な質疑応答が行われた。「良く釣りに行くが、最近ではタチウオ、タコ、メバルなどが釣れない。一方でチヌ、アイゴが増えた。」「近所の川ではかつては湧くように発生していた水生昆虫がいなくなり、魚も減った。」など、瀬戸内海や太田川、黒瀬川の環境悪化や生物減少などを危惧する多くのコメントがあった。これらの問題の根本には、地球規模での環境変化（温暖化）があり、防災に偏った改修工事が優先される河川行政がある。問題解決のための特効薬は存在しない。現下の状況で、どうすれば次世代に美しい自然を残し、釣りが楽しめる海や川を残し、持続可能な未来を残すことができるか。本講演会は、それらを考える良い機会を提供したのではないかと手前味噌的に総括する。

